

2. 3 真の建築を求めて

相変わらず週末になると、建築のガイドブックを片手にマンハッタンの街を歩き回った。いつの間にか建物を見ただけでいつ頃に建てられたのか、又、どの建築スタイルに属するかがよくわかるようになった。建築にも流行があり、それらの建築物を分析することによっ



グランドセントラルステーションのコンコース

て、その時代の経済や技術の

発展が見えてくる。インターナショナルスタイルと呼ばれる機能主義を強調した、単純な四角な機可学的な超高層の建築にはあまりムードがない。

建築とは、その時代の文化を繁栄するものである。マンハッタンに1920年、30年代に建てられたアールデコの摩天楼を見ると、文化の豊かさを感じさせられる。1970年代の初期の建物は、不況のこともあってか、経済的に設計されたビルが多く、やや貧弱で、あまり良いと感じられる超高層ビルは建てられていない。

事務所の近くにある、グランドセントラルステーションや、クライスラーや、チャニング等の建築物は、ディテールが豊かで、建築の芸術性の高さを感じさせてくれる建物である。ロバート・カーン建築事務所は経済性を重視したショッピングセンターや、集合住宅の設計を主な仕事にしていたので、建築デザインを学ぼうとする私にとっては、多少不満であった。

その頃、大学の親友の松永君と夫人の(旧姓小林)充枝さんから近況を知らせる手紙があり、彼は和設計事務所の設計主任になって、図書館とか学校建築を設計しているという。又、充枝さんは自分で設計事務所を設け、神奈川県で住宅設計で神奈川建築賞を得たという。彼女は大学での良きライバルであった。私はアメリカでまだ何も建築らしき設計はしていない。私は焦り、フラストレーションが溜まった。

この事務所に、ヨーロッパからの移民の優れた建築家があり、彼のスケッチはすばらしかった。彼がごみ箱にすてたスケッチをもらって、私なりに模倣してスケッチを描いた。そして、いつの間にか彼と同じ様にスケッチを描ける様になった。又、ある時、実施図を描いている時、“クニオの線はきれいだが、文字はきれいでないし、誤字も多いから、線だけを描いていれば良い”、と言われた時はつらかった。

かつてアイ・エム・ペイの事務所で働いていた人の描いた図面は、大変きれいだったの

で、彼の図面をもらって、自分のスタジオに持って帰り、毎晩練習した。次の設計事務所で働くようになった時には、私の図面が事務所の見本となる程に上達した。

又、ある時、オフィスの仲間が、巨匠建築家ルイス・カーンのレクチャーに連れて行ってくれた。「光と静」というテーマで、彼の作品をスライドで紹介しながらの、レクチャーであった。英語はまだ良く分からなかったが、スライドを通してのレクチャーなので、大部分は理解できたと思った。アメリカに来て初めての、建築家のレクチャーであった。いつか彼の様な作品をつくりたいと、私は思った。その後まもなく、ルイス・カーンは旅行の途中、ニューヨークのペンステーションの駅で亡くなった。

『永住権を得るために必要な私の書類を労働局が認可してくれた』という知らせがあった。その後、私の犯罪の経歴を調べ、問題がなければ移民局から永住権がおりることになるとのことだ。

次のステップとして、私は大学院に入る準備をはじめることにした。「当たって、砕ける！」という気持ちで、アメリカで最も優秀な建築学部のある大学院を目指すことにした。いい大学は授業料が大変高い。十分に金はない。しかし、何とかなるだろう、という気持ちで準備をはじめた。



冬のロックフェラーセンター、ハリソン設計

ちょうどその頃父から手紙が届いた。新しい家を建てることになって兄や妹が大半の金を出してくれることになったが、まだ足りないという。私にも間接的に出して欲しいという手紙の内容であった。この手紙を読んで、大変悔しかった。私は中学校を卒業するまでも、親から十分にサポートされていなかった。親の農業の仕事を手伝って育った。

戦後の貧困の時代がそうさせたのであるが、私は中学を卒業すると、父から自由というものだけをもって、村を出、東京で働いた。そして、自分の夢を追い続けて、今、ニューヨークまでやってきたのである。貯めた金を親に送るのが嫌だったわけではなく、その金は大学院に行くためのもので、私の追い続けている夢の一部を何かとられていく感じであらかった。ちょうどその頃、追い討ちをかける様に悪い事が起きた。オイルショックのあった年で、1ドルが360円だったものが、308円位までにドルが下がってしまったの

である。日本へ送る金もだいが余計に送金しなければならなくなってしまった。私も兄や妹と同様に父に金を送った。

それからまもなく、永住権を手に入れることが出来た。これで私はアメリカで自由に働く事ができるし、生きてゆくことが出来る。これから、アメリカで建築家として生きる為に焦らず、長期戦で行くことにした。私はいかに建築家として生きるかの再確認と方向性を確かめる為に一時帰国することにした。

なおみと約束した2年も過ぎた。彼女の2人の姉はもう結婚して、次は彼女の番となり、なおみにも縁談の話しがでたという。私の事を話すと両親は大変心配し反対したという。しかし、私が短期間の帰国をするという事を両親が知ると、彼女の父親は結婚の日を決め、式場までさがしてくれた。まさか、結婚する為に帰国することになる等とは思ってもみなかった。

アメリカで2年程生活して帰国してみると、日本の空間がさらに小さく狭く感じられた。大学を卒業して4年が過ぎていた。多くの友人は順調に建築の仕事をして、先の見通しがついた安定した生活をしている様であった。私の人生はまだ先が見えない。限らない建築家への欲望を持って、又、無理して再度渡米をしようとしている。不安が常につのっていたが、「やるしかない」と思った。これが私に与えられた道なのだと、私は自分自身をいつも説得していた。

急に決まった結婚式も無事すませて、再度渡米となった。彼女の両親には2年で帰ると約束した。

少し長い日本でのバケーションを終えて、再びニューヨークにもどってきた。もう少し



セントラルパークから見たグッゲンハイムミュージアム、ライト設計

良い設計事務所で働きたくて、仕事探しをはじめた。すると、休職していた設計事務所から、“給料を倍にするから、もどってきてほしい”という電話があった。前のチーフデザイナーが事務所を辞めたので忙しいのだという。大学院に入る為の金が必要なこともあって、再び同じ設計事務所で働くことにした。

働きながら、大学院に入る準備をはじめた。不可能なことがない国のはずだ。「当たって、砕ける！」の気持ち



シーグラムの斜め向かい、レバーハウスのビル、SOM の設計

ので楽しい。”と言ってくれた。鎌倉でおだやかに育った彼女がよくも出来るものだと思った。

私はまもなくして、アメリカでの経験と実力が認められたのか、次に得た仕事はアントニー・レーモンドの事務所であった。彼はフランク・ロイド・ライトと共に日本に来て旧帝国ホテルを設計した建築家である。その事務所はミースが設計したシーグラムの超高層ビルの中にあつた。仕事の質は私には満足できるものであつた。レーモンドのパートナーのミスター・ラドという建築家の下で働くことになり、デザインから実施図まで担当することが出来た。

そして、又、良いことが続いた。アプライした多くの大学院から合格の手紙が届いた。MIT、イリノイ大学、ノースカロライナ大学等も受かつたが、私は第一志望のイエール大学大学院に入ることにした。建築の芸術的な面を重視している大学である。しかし、条件付きの合格であつた。2年間の大学院在籍にかかる学費と生活費を保証する銀行預金通帳等が必要である、とのことであつた。私には、半年分の授業料と生活費しかなかつた。外国人学生にはローンやスカラーシップはないとのことであつた。しかし、どうしてもイエールの大学院で勉強したい。大学当局に相談するしかない、と思つた。

ある日、事務所を休んで、ニューヨークから電車で2時間位北上し、イエール大学のあ

で、アメリカでのベストの大学をいくつか選んだ。すべてが計画通りにいくものではなく、予定していた大きなプロジェクトが入らず、事務所では少しずつ所員がクビになっていった。そして、私の番がきた。今度はなかなか仕事が見つからなかつた。またしても失業保険をもらうために、長い列に並ぶことになった。

渡米してまもなく、なおみは一人でニューヨークの地下鉄に乗り、仕事の面接に行った。英語もまともに話せないのによく行けたものだ。そして、次の週からパークアベニューにあるワルドフ・アストリアホテルのビルの一階にある東京銀行のニューヨーク支店で働くようになった。雪の降る寒い日であつた、彼女はよくわからない地下鉄に乗って一人で仕事に行き、私は家にいた。何かすまないと思つた。彼女は“すべてが新しい経験で、又、友達もできる

るニューヘブンに行った。古いイギリスのゴシック風建築物が建ち並ぶキャンパスの中に、荒ケズリのコンクリート（スプリットフェイス・コンクリート）の現代風の建築がそびえ建っていた。それが建築芸術学部である。現代建築を代表する作品として、日本にいるとき写真では何度か見たことかあるが、まさかこの建物の中に入れるとは、考えてもみななかった。何としてでもこの建物の中で勉強したい、と思った。

事務局に行き、自己紹介をして、話しをしたら“コングラッチュレーション！”と言って、握手をしてくれた。そして“9月からの入学での再会を楽しみにしている”と言われた。“他に何か必要な書類はないのですか？”と、私は恐る恐る訪ねた。“すべてがオーケーですが、大学の寮がもういっぱいなので、自分でニューヘブンの街でアパートを探して下さい”と言われた。これ以上余分のことは聞くまいと思った。しかし、本当に入学できたのだろうか。それに、実際のところ、金をどうしよう。私の語学力で、勉強についていけるだろうか。日本と違ってアメリカの大学、大学院は入学するより、卒業するのが難しいと聞いている。

なおも半信半疑の気持ちでニューヨークに帰って行った。



イエール大学のキャンパス、イギリスゴシック調